

「時と人をつなぎ今飛躍の時へ」

第2回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会  
SAPPORO

大会長 草場 鉄周  
(北海道家庭医療学センター 理事長)

会場 ロイトン札幌

2011年 7月 2日(土) 3日(日)

後援 北海道、北海道医師会、北海道看護協会、北海道歯科医師会、北海道薬剤師会

## 第2回

日本プライマリ・ケア連合学会学術大会が、7月2日(土)・3日(日)にロイトン札幌にて開催されます。当院からは、血管外科 今井 崇裕先生が学術発表をいたしますのでご紹介します。

# — 抄 録 —

## 高血圧患者に対する血圧手帳を使用した患者中心の医療の検討

今井崇裕<sup>1</sup> 齊藤精久<sup>2</sup> 武井誠<sup>2</sup> 吉岡伸夫<sup>2</sup> 高比康臣<sup>2</sup>

1 西の京病院 血管外科

2 西の京病院 内科

医療機関における内科外来患者の中で高血圧患者の占める割合は大きく、その治療法の一環として食事・運動療法と共に薬物療法を行うのが一般的である。しかしながら型どおりに降圧剤の投与、栄養士による栄養指導とリハビリのスタッフによる運動療法を行っても十分な結果を得られないケースも少なくない。診療を通して感じたこととして、その原因の一つは医療スタッフ側と患者の間にある病識に溝があることではないかと思われた。今回その病識の溝を改善する方法として、血圧手帳を用いて医療機関と患者が一つの手帳を共有することにより、どのような治療効果が期待できるか検討した。

対象は2010年4月～2011年3月までに当科外来を受診した初診の高血圧患者10例(年齢  $51.9 \pm 20.1$  歳, 男/女比 5/5)とした。投薬加療の基準として収縮期血圧150mmHg以上とし、処方薬剤は全てバルサルタン1日80mgとした。また既往歴のある患者は除外した。方法は初診時に投薬加療ともに食事・運動療法についても指導を行ったが、そのうち5例の患者には血圧手帳を渡して自宅での血圧を記載するように指示した。残りの5例には自宅での血圧測定については言及せず、血圧手帳も渡さなかった。以後2週, 4週, 8週, 12週後に外来受診時してもらい血圧を測定した。以上につき検討した結果を踏まえて報告する。